

■ 追悼 故鴨志田氏

故、鴨志田君を偲ぶ

寺島 (22期)

大学1年の春、入部して新人練成1次合宿に参加した時、同じパーティの1年生は自分と鴨志田の2人だけだった。軽々とザックを背負いハイスピードで歩く鴨志田、テントの設営もラジウスの使い方も慣れたもの、こんな凄い奴ばかりがこのワンゲルに入ってくるのかと思っていたら、その後すぐ気がついた。凄い奴は鴨志田だけだった。彼が山でバテた姿を見たことがない。どんな荒天でもメゲることもない。「まあこんなもんだ」とか言いながら涼しい顔をしていた。小屋合宿の晩飯では、芯飯でもお替りは1~2位を争うほどの早食いだっただ。天王町のホワイトギョーザ 50 個もペロッと喰っていた。それも彼の原動力だったのかもしれない。その後も何度か山と一緒にいった。プライベートでも随分と遊んだ。酒は強い方ではないが、付き合いは最高に良かった。そして山に対する情熱、好奇心は人一倍である。

そんな病気とは無縁のような彼だったが、6年間の闘病の後、この1月に亡くなった。あれからまだ1ヶ月しか経っていない。正直言って、通り一遍の追悼文など書く気にもなれない。こうなれば同期の仲間が発するメールなどナマの声を寄せ書き的に集めてみることにする。

あの日、鴨志田が亡くなった翌日の午後に、ワンゲルの皆に訃報を知らせるメール文を発信してくれたのは津江だった。そのメールにはこんな文章が添えられていた。

12月の同期の忘年会に「体調があまり良くないので参加できない」と、きっちりしたメールをもらったのが最後の連絡でした。年末に入退院したばかりと聞いて、会いに行こうと思っていた矢先で残念です。今年の暑気払い(YVV 会合)に、声が出しづらいのに、昔と同じ調子で早口で優しく語っていた鴨は、最後まで前向きに病気と闘っていたことと思います。(津江)

なるほど、病気と闘うのに「前向き」とは言い得て妙である。鴨志田らしい闘いだっただ。そんな津江のメールに反応するように、今度は同期の柳沢から、鴨志田の人となり語るメールが届いた。

大学1年の頃、私はまだツッパっていたと記憶しています。その頃、ワンゲルで出会った同期の中で、年は自分より若いのに(囲碁で言うと)一目置くべきと思う人が、鴨志田君でした。時には、自分の方が年下か?と錯覚してしまうことがあるくらいでした。どうしようもなかった当時の自分も『こいつの言うことは素直に聞ける』というひとりでした。(柳沢)

確かに鴨志田には、生き方に一本芯の通ったところがあった。学生という面では我々と同じなのだが、あの当時から自分自身の行動原理のようなものをしっかりと持っていたように思う。その柳沢のメールには、自動車学校で仮免許をとった同期の連中が本免で合格するようにと、自宅のライトバンで練習を手伝っていた鴨志田のことも綴られていた。確かに、鴨志田はとても面倒見の良いところがあった。そんな柳沢のメールを読んで、今度は津江が反応する。

やな(柳沢)へ、鴨のいい思い出ありがとう。鴨は、俺が田舎の速成免許で運転未熟の時、まともに運転出来るようにと付き合ってくれた。左に寄り過ぎて何度も電信柱に擦りそうになり、その度に鴨が「ワワワッ」と声を発し、運転が終わった時は汗びっしょりになっていたことを思い出した。



新練1次合宿での集合写真S53.5 (中央前右:故人)

(津江)

なるほど、津江も運転免許では鴨志田の世話になっていたのか。確かに、誰に対しても労を惜しむことなく接していた。単なる世話好きなのか、人に対する好奇心か、人の成長を手伝いたいという優しさだろうか。あの当時から教師という職に就くのに相応しい人材だったのだろう。

1月23日のお別れ会の後、遠方、富山で開業医をしている立浪からこんなメールを受け取った。

月日は流れます。鴨とは、なんとなく卒後も気楽な付き合いでした。卒後の医学生時代は、無謀にも鴨と北アルプス縦走し散々でした。突然の医学研修、バイク旅行などなどモーター鴨ハウスは最高に居心地もよく、いつも最高の笑顔で歓待してくれました。

6年前、医師の生業の為、立浪なら特に動じないだろうと思ってか知る由もないところだが、たまたま彼から癌の事を知らされ、その後、ずーと鴨の死の覚悟を感じつつ、鴨め〜るに対し『生きていかい』と返していました。彼のモットーは、日本一元気な癌患者。(中略)

鴨を「送る会」の日は、富山空港 羽田空港とも晴天で、翌日も晴天、飛行機往復ではいつまでも富士山を眺めていました。いや〜鴨晴れでした。送る会では、浅沼の弔辞は鴨志田岳志を完全復活させていたし、寺の応援歌は、鴨志田岳志をそしてその仲間たちを完全融合させていたし、そして、なんとなく彼はもういないんだと。(立浪)

立浪のメールに共感する。まさに鴨志田は「日本一元気な癌患者」を標榜して、笑顔を絶やすことなく闘病生活を送っていたのではないかと思う。

亡くなる至近までメール交信のあった谷内からは、「葬儀に参列したとはいえ、また、鴨くんからのメールが届くのではないかと思う日々です」とのコメントの後に、こんなメールが届いた。

鴨くんからの最後のメールは大晦日に「急遽退院が決まり、自宅で新年を迎えられます」というものでした。鴨くんなら奇跡的に回復し、また元気な姿をみせてくれるのではと願っていたのですが・・・

残念です。

訃報が届いた翌日、鴨くんと共通の知人から「鴨さんのこと、聞きましたか?」「鴨志田さん、悲しくて、悲しくて…」とメールが何通か届きました。職場においても、慕われていた鴨くん。きっと、学生時代と同じように面倒見がよく、信念をもって教育に携わっている姿に、周囲から人望を集めていたのでしょうね。

鴨くんとメール交換するようになったのは、鴨くんの発病と私の2年連続の大怪我の時期が重なり、鴨くんに励まされたのがきっかけでした。鴨くんの方が治療や先への不安が大きかったにもかかわらず、私の復職を喜んでくれる優しい人でした。昨年の夏以降は、病状が激変し体調不良や身体が不自由になっていく様子が書かれていましたが、病状を冷静に受け止め、最後までポジティブに生きようとしていました。メールを読み返し心中を察すると、涙がこぼれてきます。(谷内)

同じ神奈川県で教職に就いている谷内には、職場での鴨志田を知る共通の知人がいるのだろう。職場でも周囲から慕われていた鴨志田先生の姿がうかがえる。

5年ほど前、自分は仕事で青森に単身赴任した。それから鴨志田とはメール交信が多くなった。メールには病状変化や仕事のことなどもあったが、治療の合間をみては「今度は利尻岳に登った」とか「鳥海山、月山にも登った」とも綴られており、そして最後には、毎回「まあ、元気にやっていますから」と記されていた。本当に元気な奴だと感心した。史上最強の癌患者として、何歳になっても同期の誰よりも長く山に登り続けるのではないかと思っていた。メールに山の写真も添えれば更に話が弾んだ。彼の返信に「俺の分まで山を楽しんで下さい」というフレーズが現れ始めたのはいつ頃からだろうか、病状が悪化していたのだろう。彼の「悔しい想い」を通り越したその先にある「優しさ」を感じる言葉である。

同期では10年前に中丸を交通事故で亡くした。鴨志田で2人目である。ふたりとも若過ぎる、残念でならない。人に優しく、自然をこよなく愛した2人、きっと今頃はどこか遠く残雪の山で、2人で春スキーでも楽しんでいるのではないだろうか。